

「見も知らぬ 付添婦さんに
オムツの世話受け
恥も外聞も粉々になる」

「真夜中に
オムツの取り替え 二回ほど
何で意識が あるかと思う」(八坂スミ・1985年)

1985年、作者の八坂スミさん(当時95歳)は、歌集、『わたしは生きる』(青磁社刊)で、「多喜二・百合子賞」を受賞した。この2句は、その140ページに掲載されている。

オムツの世話をうけて生きる心境が痛いほど迫ってくる。
わが国で、一番はじめに女性獣医師の資格をとった有田和子、若い頃は、「地球を蹴って歩いてはる」と言われていた人が、オムツの取り替えで、下半身丸出し、右にゴロリ、左にゴロリと、揺すられながら耐えている姿は見るにたえない。

ヘルパーさんの作業の重さを思えば何も文句は言えない。が、むきだしの下半身を、無残に照らす蛍光灯の光を、そつとタオルでさえぎってくれているヘルパーさんもある。そんなときには何故か心底、ホッとする。

たしかに、耐えることもたたかいなのだ。
「生きてるうちは頑張らんなあ」、
の根性は、足腰立たなくなったいまも失せていない。

4、道は一つ

「われながらよく働くなあ。自分でも褒めてやりたい。」
毎月、早朝、2回、燃えないゴミの集積場に往復しながら思う。

冬場は、まだ星がでている時間、集積所で会うのは、たいてい、若い女性ばかり。

人間80歳をこえると、隠居暮らしでノンビリといきたいものだ。
だが、わたしには、なお、きびしい試練の日々が待っていた。
それでも、この数年の体験には得がたいものがある。
最大の収穫といえ、なんといっても健康と長寿だ。